

地域産飼料の広域流通による稲WCS給与量の拡大

東近江農業農村振興事務所農産普及課

【普及活動のねらい・対象】

東近江地域では、耕畜連携による水田のフル活用と畜産経営の安定化を目指して、稲の子実と茎葉を一緒に発酵させた稲WCSなど地域産飼料の生産とその利用を支援してきました。稲WCSは、耕種農家が栽培された飼料イネを作業受託組織の専用機械で収穫調製し、混合飼料(TMR)を給与する酪農経営体等で利用する仕組みで、拡大してきました。

水分率が高い飼料であることから運搬面の問題があり、従来は旧市町内での耕畜連携を基本として推進してきましたが、近年の畜産農家の減少により、広域流通が今後の課題となっています。そこで、地域産飼料の積極的な利用を望む酪農家を対象に、広域流通により稲WCSの利用拡大を図り、飼料費削減による酪農経営の改善を支援しました。

【普及活動の内容】

稲WCSの給与拡大を目指す酪農家に、現行の1.5倍量となる10kg/日・頭(6ロール/日)の給与を提案するとともに飼料費節減効果を提示しました。

必要となる稲WCSは年間2,190ロールであり、利用畜産農家が減少した4地域・団体からの広域流通を可能とするため、栽培地の市町やJA畜産部署と連携し飼料のトレサビ対応のほか、運搬や保守管理の体制確立に向けた取組を支援しました。

あわせて、稲WCSと牛糞堆肥による循環型農業に発展定着するよう良質堆肥の生産に向けた取組を支援しました。



写真 TMRミキサーで完全混合した飼料として給与

【普及活動の成果】

稲WCS給与量を6ロール/日に増やすことで飼料費の削減を目指しましたが、一部地域で稲WCSの低品質問題が発生したことから3地域からの供給可能量は1,580ロールとなりました。

目標としていた稲WCS量は確保できませんでしたが、一定期間6ロール給与の作業体系の実証を行い、当初見込んでいた飼料費削減を上回る7%のコスト削減も期待できることが明らかとなりました。今後も、良質な地域産飼料の広域流通の体制確立を支援します。

また、資源循環型農業については、家畜ふん尿処理過程の点検や先進事例の調査を行い、処理能力を向上する必要性が理解され、新たな施設整備を計画することが決定されました。水田フル活用による飼料生産と地域産飼料の利用拡大による畜産経営改善について引き続き活動します。

◎対象者の意見

稲WCSを多量給与するための機械整備も行ったので、早期に6ロール利用に取り組みたい。
(A牧場)